

## 守永直幹先生の《生命と機械の間で》(2)「機械とは何か」 そしてそれに対する浦井憲先生のコメント を読む

2017年6月26日 村田晴夫

守永氏の論考は、氏の豊かな知識から導き出される、一種イローニッシュな風貌を持つ。人工知能AIの進歩と発展によって、機械は新しい次元へと飛躍しつつあるのだろうか。そういう様相を見せる現代社会とこれからの文明の移り行きに対する警告を籠めた考察が展開されていて、いろいろなことを考えさせられました。それに対して、私なりのコメントを書き始めたときに、浦井憲先生のコメントが掲載されたので、それも含めて私の感想を書き留めておきたいと思います。

### 1. 主体性の哲学、あるいは実存主義の哲学とホワイトヘッド

前回の論題を受けて、「主体性についての考察」から始まる。実存主義こそ、主体性の哲学であった。(最近、たまたまキェルケゴールを読む機会があった。感謝。)

キェルケゴールはその著『死に至る病』を「人間は精神である」という宣言から書き始める。そしてそれは次のように続く。「精神は自己である。自己はその関係それ自身に関係する関係である」。

これをホワイトヘッドの哲学と比較するのは興味深いと思われる。

どこかで両者は共通していると思われるが、どこかで両者は分かれなければならないであろう。その境目を明らかにしておく、これは意味のある仕事のように見える。

西田幾多郎は、キェルケゴールのここを引いて、「実践哲学序論」を書いている(全集第10巻)。

### 2. 機械と人間——守永先生に

機械とは何か、この問いはすなわち「人間とは何か」という問いである、と言われる。まことにその通りである。

機械がどんどん進化して、ついに感情や意識までも内包するようになるとすれば、それはどうということなのか・・・

「精巧な人造人間たちが自己意識に目覚め、自分が置かれた悲惨な境遇に疑問を持ち始める」(3頁)

これはいまはSFの世界である。ここまで行くと、人造人間アンドロイドは人間と区別が無くなってくるのかもしれない。実はそうならないと守永氏は考えるのである。

意識、自由意志、その本質が問われる。

前述の「人間は精神である、精神は自己である」というキェルケゴールそして西田幾多郎の宣言はどのように答えるのであろうか。

「精神」とは何か、この問いに行き着くであろう。

この問いに対する守永理論というべき見解が披露される。

まず機械は、工学機械→情報機械→生物機械と急速に進化してきたと言われる。それぞれ工学機械は熱の宇宙論を、情報機械は情報の宇宙論を背景としているのであり、生物機械は生命を語ることになる。生命に関する守永氏の記述をそのまま引用する：

生命とは、(1)能力が限定され、(2)おおむね他律的で、(3)開けっぴろげで、(4)万事に不正確で、(5)複製が下手で反復を嫌い、(6)自分と他人との区別がつかず、誰とでも置き換え可能で、(8)役に立たず、(9)目的を持たない存在、とされる。

いかにも反論したくなる項目が目立つように見えるが、考えればそれぞれが実にもっともなことなのである。人間における生命の特質を見事に浮き掘りにしている。

#### \* 機械と人間を分かちもの

「機械仕掛けの人間」という見方について語った上で、機械から人間を分かちものについて語られる。

まず、人間には、おのれの心を支配している「内なる主人」がいると言われる。それをまた、フロイトの深層心理学、ドゥルーズ＝ガタリの『アンチ・オイディプス』を引用して語られる。

その上で人間と機械を分かちものについて、守永氏の結論は「自由意志」であるとされる。

「自由意志が人間と機械とを分ける分水嶺である」(8頁)

#### \* 敗北する人間

だが、未来を見ると、それは必ずしも明るくはない。

AIは人間を支配するか・・・。AIの得意分野がある。そこではAIの方が人間を上回り、支配することが出来るであろう。囲碁、将棋などの人工的なゲームの世界ではAIが支

配することが可能である。この世界では感情が働かない、単に知性によって割り切れる世界である。

しかし、感情と意志が働く人間の世界にあっては、AIは人間を支配することが出来ない。守永氏によれば「人工知能が解決できるのは人工的な問題に過ぎない」（12頁）のである。

人間の持っている特徴としての知・情・意の分野の中で、人工知能AIが人間を凌駕できるのは知性に関わる分野だけであって、他の情・意の分野では人間を超えることができない。守永氏はそう結論しているようだ。

#### \* 無限

守永氏が論じている問題で、ここではあまり深く追究できなかったのが無限の問題である。無限には、人為を超えるものを漠然と意味させる場合がある。囲碁や将棋の手の数は有限であるが、その中から最善手を選ぶことは、その操作作業において人為を超えている。ここには無限があるように見える。莫大数 *immense number* などと呼ばれている。

ベルタランフィ『一般システム理論』（邦訳、22～23頁、原著 p.25.）には Ashby らの引用とともに莫大数 *immense number* が語られている。（私の記憶では他にもこの問題に触れられていたように思いますが、手近なところには見つかりません。どなたかご存知の方、教えてくだされば有難いです。ブレンメルマンでしたか・・・？）

「無限性が露出すると社会が揺らぐ」（9頁）と守永氏は言う。それを引き受けてきたのが文学であり、芸術であったと。ここに宗教も加えてよいであろうか。どうであろう？

この問題について、意見を聞かせて欲しいと思っています。

### 3. 「機械はフローチャートあるいは設計図」そして普遍言語の問題に・・・

この辺りまで書いて、さてと考えていた時に、浦井先生のコメントが掲示板に載せられました。

「機械とは何か」という問題に、浦井先生は、目的に合うように作られていること、具体的には「設計図がある」こと、とまとめておられます。

設計図が書けるような、あるいはフローチャートが書けるような、プログラミング言語の問題になる、と浦井先生は言われます。

なるほど、そうですね。

そして浦井先生は続けて、このような「機械とは何か」という問題を論ずるときに、哲学的議論の重要性を認めつつ、「哲学的議論」とは何かという限定が必要ではないかと問題提起されます。

ここまでの議論には、私も異論有りません。

問題は浦井先生も仰るように、その「哲学的議論」とは何かを論ずるときの言語と論理であると思います。あるいは価値観を排除した語りでしょうか。

例えば、「機械とは何か」という問題について論ずるときに、価値観を出来るだけ抜きにした議論がまず基礎になければならないでしょう。「出来るだけ」と限定したのは、絶対ということが保証されないからです。

その上で、人間と文明の現在から未来への展望を語る時、普遍論理（数学などに現れている、あるいは内包されている論理）を尊重することが必要でしょう。

普遍論理を数学などに現れている論理、あるいは内包されている論理、と解してよいでしょうか。

この辺りのことを含めて、普遍言語あるいは普遍論理とはどういうものであるか、教えて頂ければと思います。

なおよく考えてみたいと思っています。